

「回想」建設準備室時代

島根県芸術文化センター
センター長 野 克 之

昨年の8月に澄川前センター長の後を継ぐ形でセンター長に就任し、早いもので1年になるうとしています。その間、新型コロナも5類に引き下げられ、グラントワのホールも再開し、賑わいが徐々に戻りつつあります。やはり、美術館やホールは賑わってこそという思いを改めて感じます。

覧会が今秋石見美術館で開催されます。私はかつて島根県庁にあったグラントワの建設準備室に勤めていました。そこで、今回はそのころのエピソードをいくつかご披露しましょう。

先日大ホールで催された森山直太朗さんのコンサートに参加しました。久しぶりに満席になった大ホールで、演者と観客が一体になったひとは、やはりかけがえのないものでした。もちろん演者と観客だけでなく、ホール側のスタッフをはじめとする、当日表に出てこない方々の奮闘があつて初めて成り立つものといつてよいでしょう。

グラントワは2000年度に設計コンペを実施し、その結果内藤さんが設計者に選ばれました。設計コンペ当日は、綺羅星のような建築家が次々と登壇し、審査員に自分の設計意図を説明します。説明時間は時間厳守なので、時間が来たら鐘を鳴らして話を終えてもらいます。不幸にもその鐘を鳴らす担当に私が抜擢されたのです。

この素晴らしい大ホールを持つグラントワを設計した方は言うまでもなく内藤廣さんですが、内藤さんの展

ある建築家の話が佳境に入り、もう少しで終了するというタイミングで、私は無情にも鐘を鳴らしました。広い会場に大きな「カーン！」という音が響き渡り、会場が一瞬凍り付

きました。審査員長が「時間厳守です。これで終了してください。」と言つてくださったのでほっとしましたが、ひやひやものでした。

設計者が内藤さんに決定した後は、内藤さんとその建築設計事務所のスタッフとの付き合いが始まりました。スタッフは皆若く元気で、いつ寝ているのか全く不明でした。スタッフとの打ち合わせは、日付を跨ぐことも珍しくなく、しかも真夜中まで協議した内容が、朝出勤すると設計図面に反映されているのです。先日内藤さんにその話をする、「寝ずにやってるね。」と事も無げにおっしゃいました。その時のスタッフは、その後どんだん事務所を単立って行き、今は皆さん全国の色々なところで活躍されています。

内藤さんと話をしているとご自身の設計した建築を素直に素晴らしいと自慢されます。しかし、決して自分が優れているから優れた建築になったということは一切おっしゃらないのです。このコンクリートを打つ職人さんがハイレベルでこないいい仕上げになったとか、いい建築資材が手に入ったので、こんなに美しくなった。あるいは、建築設計事務所の人々の努力でこういう設計になった、という言い方をされます。内藤さんがスタッフをしっかりと束ねてゆかないと、こんな大きなプロジェクトは成り立ちません。内藤さんが心からスタッフや職人さんたちを大事にしているからこそ、皆さん内藤さんのもとで力を発揮するのでしよう。

建設準備室での数年間は忙しくもやりがいのある時間でした。その時に経験した様々な事柄が、その後の私の人生の指針になっていることは間違いありません。



左から 野克之センター長、内藤廣氏、川西由里専門学芸員

企画展「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」は2023年9月16日（土）から12月4日（月）までの会期で開催されます。本展は他県へ巡回せず、石見美術館だけの開催です。お楽しみに。

澄川喜一先生のご逝去に寄せて

島根県立石見美術館学芸課長

南目美輝

グラントワの初代センター長、澄川喜一先生が逝去されました。澄川先生は、抽象彫刻の第一人者であり、また東京スカイツリー®のデザイン監修者として広く知られています。地元では、なによりグラントワの「顔」であるセンター長として、2005年の開館以来17年以上その運営に関わってこられました。

先生はセンター長に就任されてから、さまざまな場でグラントワのことを多くの方に紹介してくださいました。

まず石州瓦をふんだんに使った建物の美しさ、ホールの響きの素晴らしさといったハード面、それからグラントワでの舞台やコンサート、展覧会といったソフト面について話され、その後必ずボランティアがさまざまな面で館の運営を支えていることを誇らしげに語られました。

また、グラントワの黎明期の話しをよくされていました。曰く、地元的女性たちのグループがとても熱心で、最初はこの規模の街で文化施設を維持

していくのは厳しいだろうと感じ、「火消し」するつもりで関わったのに、「火」はほとんど燃え上がってしまった(笑)、と。この頃の状況については、わたしたち職員よりも詳しい方が本通信の読者には何人もいらっしゃるでしょう。

自身が東京藝術大学学長として美術館の開設などにかかわった経験から、グラントワについて、計画段階では前途多難と感じていたものの、蓋を開けてみると、予想していたよりも多くの方に使っていたにいたることを、そしてなにより地域の人々がボランティアなどの活動を通じ、開館後も継続して支えてくださっていることを、嬉しい驚きとして受け取っておられたようです。

一方職員に対しては、特に開館当初は広報に力をいれるようハツパをかけた続けられました。私たちも、劇場と美術館の複合施設としてのあり方を、広報に限らずあらゆる点において、走りながら試行錯誤しているという状況でした。美術館事業については、学

芸員が提案するものを応援してください、現場のモチベーションが高く保てるようなスタンスで見守ってくださいました。

私たち職員は、地域の方の思いに加えて、今後は澄川先生の思いにも応えられているかと自問しながら、仕事に取り組んでいくことになりました。

澄川先生、長い間本当にありがとうございました。



澄川喜一先生と《Orochi》 2015年撮影

の現代作家たち」関連プログラム『宇宙を翔けるアート 野村康生リポート・ギャラリートーク』が開催されました。

ギャラリートークボランティア会員への案内があり参加。

学芸員川西さんが米国のネバダ州を旅している野村康生さんとリポートで会話する様子を拝見しました。

益田出身のアーティスト野村さんの作品が国際宇宙ステーションに送られ現在宇宙空間を旅しているとか。いろいろと話しをされ、驚きました。

また、7月9日まで、故澄川喜一先生への献花台・記帳台がグラントワ内に設置され、私も献花・記帳したところ です。

情報発信ボランティア 洗川光廣

生花ボランティアより

生花ボランティアで使う花は、自分の庭、友達や近所の人などの協力で成り立っています。いつもありがとうございます。

生花ボランティア K.M

あ と が き

梅雨の雨の降りしきる今日七月一日、高津川も近年にない増水で川面に水蒸気が漂う風景が見られました。

丁度、この日、石見美術館の展示室Cで、コレクション展「石見